

〔共同研究：精神保健福祉士の価値に基づいた実習教育に関する研究〕

精神保健福祉士の価値に基づいた 実習教育に関する研究

——指導者から伝授された PSW の価値を実習生が体得していく過程——

山 内 はるひ
栄 セツコ

1. 研究の背景と目的

1997年に『精神保健福祉士法』が制定され、「クライアントの社会的復権と権利擁護」を実践の目標に掲げる精神科ソーシャルワーカーが国家資格化された。その後、精神保健福祉士（以下「PSW」という）に求められるニーズが多様化し、PSWが活躍する領域は精神医療・保健・福祉領域に留まらず、司法や教育、就労領域に至るまで多岐にわたるようになった。また、精神保健福祉領域に関する法制度やPSWを取り巻く社会情勢も変化し、それに応じて『精神保健福祉士法』も2011年6月に改正されることになった。具体的には、PSWの養成課程における教育内容の見直しが行われ、より実践力の高いPSWの養成を目指して、知識・技術を柱とした科目体系へと改編されることになった。実習関連では、演習・実習の時間の拡充とその構造化、教員等要件の見直し、巡回指導の強化の3点が盛り込まれた。学生は実習で現場のPSWの実践やクライアントの実生活にふれることで、今まで学んできた知識や技術を体験的な学びに結びつけ、理論と実践を統合させていくことになる。それは、実習がPSWとしての価値の学びやPSWのアイデンティティの形成の可能性を生む点で、PSW「になる」原点の学びの場といえる。久保が「ソーシャルワークは価値の実践といわれ、専門性の構成要素のなかで価値が重要な位置を占めている」¹⁾と指摘しているように、実習ではPSWの価値を体得することが目標の一つといえる。「PSWの価値」に関して、日本精神保健福祉士協会精神保健福祉士業務指針及び業務分類（第1版）では、PSWとしての「理念を具体化させ、業務遂行にあたって知識や技術に裏づけされた実践を行うために基本となるものがソーシャルワークの価値である」²⁾とし、それは「『精神保健福祉士』と名乗

1) 久保美紀（2004）「スキルの教育と訓練」岡本民夫・平塚良子編『ソーシャルワークの技能』ミネルヴァ書房，175-193.

2) 日本精神保健福祉士協会（2010）「精神保健福祉士の基盤と業務指針の位置」『精神保健福祉士業務指針及び業務分類 第1版』

キーワード：精神保健福祉士，実習教育，価値の伝授，ジレンマ

るものの思考・行動の基準となるもの」といえる³⁾。しかし、ソーシャルワークの価値は可視化できるものではなく、抽象度の高い概念であるため、指導者が実習生にスーパービジョンのなかで行っている価値の伝授方法を明らかにする必要性は高い⁴⁾⁵⁾。その際、実習生とその実習指導者の双方から PSW の価値の学び／伝授を明らかにしたものはほとんどみられない。

そこで、本研究の目的は、現場実習のなかで、実習指導者がいかに PSW の価値を伝授し、実習生がそれを体得していくのかを実習生とその実習指導者のインタビューから明らかにすることである。

II. 研究方法

本調査研究は3段階で行った。まず、実習経験者（以下、実習生）3名とその実習指導者（以下、指導者）3名、そして実習担当教員2名が PSW の価値や精神保健福祉士法のカリキュラム改正について学習し、実習の役割や機能について議論を重ねた。その後、PSW の価値に照準をあてた実習に関する調査内容についてブレインストーミングを行い、そのうえでインタビューガイドを作成し調査を実施した。そして、その調査結果をふまえて、PSW の成長段階に応じた価値の深化と価値の重層性に関する過程を提示した。

調査方法は、実習生とその指導者の同席のもと半構造化面接を1時間程度行った。その後、分析の過程で不足したデータに関してはその都度、文書等で情報提供を願った。インタビューである実習生は大学教育のなかで PSW 養成課程を修了し、現在 PSW として勤務している者で、指導者はそれぞれの実習生の指導に携わった PSW である。調査は2012年4月～2013年3月までの間に行った。実習生はいずれも2カ所の機関で2週間ずつ実習を行っており、インタビュー内容は後半に実施された実習機関の実践である（表1）。インタビューの内容は、実習生には「実習中における指導者からの振り返りで印象に残った場面」「現在の業務に根付いている指導者から伝授された価値」についてである。また、その指導者には「実

表1 インタビューイの属性

インタビューイ		実習生A (指導者A')	実習生B (指導者B')	実習生C (指導者C')
実習機関	前半	保健センター	保健センター	保健所
	後半	地域活動支援センター	精神科病院	精神科病院
実習生の現在の勤務先 (経験年数)		精神科診療所 (8)	市役所障害福祉課 (5)	大学院生・NPO 法人 (2)

(2014〔平成26〕年3月末現在)

3) 栄セツコ (2014) 「援助者になることを規定する価値」『響き合う街で』108, 54-57.

4) 栄セツコ (2014) 「精神保健福祉士の価値に基づいた実習教育に関する研究—ソーシャルワーカーのアイデンティティを伝授する試み—」『桃山学院大学総合研究所紀要』40(1), 133-145.

5) 栄セツコ (2012) 「自分という武器を磨くことの大切さ 「クライアントから学ぶ」ことのできる感性と誠実さ」『精神保健福祉』43(4), 293-294.

習生があげたインシデントについて、その事象に基づく価値の伝授法」を振り返ってもらった。

倫理的配慮として、インタビューには本調査の目的、個人情報保護、調査研究成果の公表等を口頭と文書で説明し、同意を得た。インタビューの内容は本人の同意を得て録音し、逐語録を作成した。

III. PSW 実習の概要

実習生3名をA, B, Cとし、各々に対応する指導者をA', B', C'とする。文中の「 」で記した部分は実習生の言葉を引用したものであり、また指導者との対話や参加メンバーとの議論の内容もデータとして使用した。『 』は価値に関連した用語であり、()は筆者らが加筆したものである。尚、実習生等が実際に使用した言葉以外は、「本人」に関連する言葉は「クライアント」と統一して表記することとする。

1. A氏

1) 実習機関と実習内容の特徴

A氏の実習機関は地域活動支援センターである。「実習生にはクライアントの生活や人生から学び、様々な価値観やクライアントの思いを知ることが大切」という指導者の実習方針に基づき、主にフリースペースでクライアントと過ごすことが多かった。

2) 価値形成につながった実習場面

クライアントとかかわる PSW の姿を見て、A氏は「人間同士のかわりのなかから生まれた関係性」に気づき、そこから『受容、共感』『クライアントを置き去りとした支援をしない』『クライアントとの誠実な向き合い方』『クライアントとの関係性のあり方』という、支援／援助における『関係性の大切さ』を学んでいた。

また、クライアントとのたわいもない日常会話から「自己実現を目指すクライアントと、それを支えるスタッフが自然に認めあい、尊重しあい、回復をつくりあげている印象を受けた」「リカバリーは日常の場面で自然と行われることが重要」「リカバリーの雰囲気をつくりあげることが難しい」という気づきがあった。実習のテーマに「リカバリー」を掲げていたA氏は「リカバリーは個性や自主性、積極性、自己決定が重要視される」「リカバリーにはクライアントと支援者の対等な関係が必要」「相手を尊重し、クライアント同士の力動、関係性の芽生え、変化をキャッチし、育てていくことが大切」と語り、リカバリーには『対等な人間関係や信頼関係に基づく人権尊重が不可欠』という価値を学んでいた。

さらに、A氏はクライアントの個別支援計画を提案する機会を得て、クライアントと共に銭湯に行く支援を行った。しかし、後日、その入湯料はクライアントにとって高額なことが判明した。振り返りで、A氏はクライアントの生活状況を把握できておらず、指導者は「援助の枠組みは正解があつてないようなもの。それが個性。その人に合わせてプログラムを

考える必要がある」と、支援／援助における『個別性』や『主体性の尊重』について伝えていた。これを受けて、A氏は「自分の枠で考えていた」ことに気づき、『クライアント主体』と『個別性』を基盤とした支援／援助には『人と環境の相互作用』の観点に立ったアセスメントが必要であることを学んでいた。

そして、A氏が実習した時代背景が『障害者自立支援法（現、障害者総合支援法）』の施行時期であり、今後の施設運営の方針を決める時期だった。このような法制度の転換期にあたって、指導者は不安を抱くクライアント個人に対応していた。その一方で、新法に対して問題提起をし、他機関と機関の枠を超えて連携しながら社会に働きかける活動をしていた。その姿を見て、A氏は「『これぞワーカー！』と感じた。PSWの価値、専門職としてのプライド、情熱をしっかりと持っている」と語り、そこから「本人主体、個別性をしっかりとった上で、制度に振り回されないぶれない芯をもっているところにPSWの価値を感じた」と話し、クライアントの『権利擁護』と『社会変革』の大切さを学んでいた。

3) 実習全体を通して指導者から指導されていたこと

指導者は「実習ではクライアントの生活、人生から学び、様々な価値観やクライアントの思いを知ってほしい」と伝え、PSWの体験学習の機会を提供していた。だが、A氏は感情や言動の言語化が苦手なため、指導者との振り返りでは言葉に詰まることが多かった。A氏は「『こうあらねばならぬ』という枠からはみ出ることの難しさ、（あるがままに）その人を受け止める難しさ」を感じており、「断定した言い方」が多かった。そこで指導者は「PSWは言葉が武器なので、もう少し言葉を出さないといけない」と指導し、「専門職としての価値に照らし合わせるとどうなるのかを常に尋ね、枠組みだけでなく、見えたことをどう感じるか、なぜなのかを深めるなかで専門性が見えてくる」とPSWの視点や重視すべきものへの気づきを促し、それを表現する言葉を体得するよう指導していた。A氏は「毎日振り返りをしてもらうことで、…(中略)…価値とは何かを意識するようになり、それを言語化する必要性を感じている」と語っていた。

2. B氏

1) 実習機関と実習内容の特徴

B氏の実習は精神科病院で行われた。外来、病棟および関連施設を数日ごとに巡回し、その日の振り返りは各部署の担当者が行い、全体的なスーパービジョンは実習担当の指導者が統括した。

2) 価値形成につながった実習場面

B氏は保護室で隔離されているクライアントに対して「申し訳ない」と思っていた。その理由は自分自身がクライアントに法の下で行われている適切な医療の説明や、クライアントの生命を守るために必要な状況の説明ができないことによるという。それに対し、看護師から「本当ならモニターで監視されたくないし、トイレだって扉のあるみんなと共同のところ

でしたいはず」と言われ、また指導者からは「精神科にある非自発的入院、隔離、拘束という特性があること、なぜそうなったのか、現在も必要なのかを『常に』確認する必要がある」と指導された。そこからB氏は「鍵がかかることで自由を奪われるような感覚、不安、焦燥感、切迫感を想像し、保護室の利用は必要最低限で行わなければならないと強く感じた」「精神科医療の現場では（職種にかかわらず）クライアントの人権を意識し、常に葛藤を抱きながら働いている」ことに気づき、『これが正しい』と思うよりも、『これで良かったのか』と思うことが大切であると自らの実践を振り返る必要性を学んでいた。

また、B氏はクライアントから「(あなたは)若くていいわね。私はもう歳だし、病気だし、駄目だわ」と話しかけられたが、その言葉の返し方がわからず、とっさに話題をそらしてしまったという経験があった。B氏は「一人ひとりの人生にふれることの難しさに一歩ひいてしまう」「きちんと言葉を考えて話さなくてはいけないと思った」「自らの人生経験の未熟さという不安材料を片手に、自分の持つ価値観を頼りにするのではなく、専門職としての価値や視点に基づく実践でなければいけない」「(クライアントの)立場に立って考えるのが、とても難しく思えた」という気持ちを抱き、援助者に求められる技術、知識、価値の体得を自問自答していた。

B氏の様子を観察し、指導者は「クライアントへの発言に対して考えながら話をしている」「緊張していたのか、一歩ひいており、自然でなかった」「普通にふるまおうとしていても実習生の不安感が出ていた」という印象をもっていた。そこで、その日の振り返りで、指導者はB氏が安心して話せる雰囲気をつくり、「(クライアントとの距離の取り方を)遠慮しているよね」「不安や困惑がある自分に気づいておくことが必要」とB氏の援助関係の特徴や自己覚知の必要性について指摘した。それを受けて、B氏は自分のなかに「実習生である自分がクライアントの心に触れるところまで聴いてしまっているのだろうか、知りたいけれど知ってしまっても何も出来ない無力感との狭間に困惑があった」。このように援助関係で悩む背景には、前回の実習指導者からクライアントとの距離のとり方について課題を指摘されたことがあり、そのことが消化できないまま同様の場面で戸惑いがあることに気づいた。そして、指導者による振り返りで「自己覚知をするからこそ、どうかかわるかを考えることができる。一方的で独りよがりなかわりをしないためにも、専門職としての価値や技術の他に、自分自身の特性を知る重要性を実感した」と、援助主体である自身の自己覚知の必要性を学んでいた。

指導者による振り返りにおいて、「マイナスのことを言っても批判せずに(指導者が)受け止めてくれた」ことで、「自然に感じることを大切にできればいいと思えた」と語るように、B氏は自身の気づきの言語化により自己覚知が促進されていた。また、B氏は指導者に対して、自身の援助観を質問したところ「クライアントと接するにあたって、お互いが知り合えたことの喜びを感じ、共に成長し笑って過ごせる援助を大切にしている。そのなかで自分を見つめ、自分らしさで接していくことが大切。笑顔は援助者にとって最高の資質」とい

う返答を得ることで、B氏は「心のなかに何かがストンと落ちる」経験をしたと語っていた。また「ともすれば、我々（PSW）はかかわる人の人生を変えてしまう」という大学教員から教授された言葉の深さと意味を体験的に理解できたという。このように指導者の援助観がB氏の援助観の形成に大きく影響しており、B氏にとって、現在も指導者がPSWのモデル像となっている。

3) 実習全体を通して指導者から指摘されていたこと

B氏は指導者から「本当に知りたかったことを見る、知る機会が減ってしまっているようで残念」と指摘された。これに対し、B氏は「『質問すること』が勉強不足という負い目があった」「自分の持つ感覚がPSWとして不適切なものであれば、学校にとって不利益（大学の名誉にかかわる）になるのではないかという不安があった」「職員の忙しそうな姿に気を使ってしまった」という不安や遠慮を反映するものだったという。B氏にはクライアントとの『距離のとり方』という基本的な課題があったため、「実習に対して慎重になり、構えすぎていた部分があった。もっと積極的に取り組めば知る幅も広がり、感じることも深まったのではないか」「実習生としての苦悩を指導者に相談したかった」と自身の実習に対する態度を省察していた。

3. C氏

1) 実習機関と実習内容の特徴

C氏の実習は精神科病院の慢性期病棟を中心に行われた。その日の振り返りは病棟担当者が行い、全体的なスーパービジョンは実習担当の指導者が統括した。

2) 価値形成につながった実習場面

C氏は約40年間入院しているクライアントとの出会いがあった。そのクライアントは退院促進支援事業（現、精神障害者地域移行・地域定着支援事業）を活用しており、ケースカンファレンスに指導者と参加する機会があった。C氏は指導者に「PSWが退院の機会を提供することは意義深いものの、クライアントの生きてきた人生を知り、その後の人生と一緒に考えていくPSWの役割は責任が重い」と言葉にした時、指導者は「長期間入院しているクライアントの生の声をもっと聴いて様々なことを感じてほしい。長期入院や退院が実現しない経緯やC氏の考えていた『入院』のイメージと実際の違いをどう感じたのか」と問い、『クライアントの立場から入退院の意味をとらえること』『クライアントの言葉からその人の人生を理解する大切さ』を伝えていた。

また、指導者は「私たちが感じる様々な疑問が支援や援助の原動力になる。そういう疑問を述べてほしい」と『疑問』を言語化する必要性を伝えていた。そこから、C氏は「指導者のいう『疑問』を言語化できず悔しかった」と振り返り、『地域生活の重要性』『生活者の視点』という抽象的なとらえ方しかできなかった」と具体的な実践場面からPSWの価値を導くことができない自分に悔しさを言葉にしていた。

さらに、クライアントが退院先として入院前の住居を希望したことから、PSWはその実現が可能か否かを確認するため、本人とその地域を訪れた。しかし、当時の面影は全くなく、PSWはC氏の思いに共感しながら、退院先として本人が希望する地域に類似した場所を提案していた。C氏がクライアントに寄り添いながら信頼関係を形成する姿をみて「クライアントとの信頼関係があって、初めて援助関係ができる」という気づきを言葉にすると、指導者は「関係づくりは基本であり、一番大切なこと。(クライアントと)一緒に退院を考えることで、相手から教えてもらうことも多い。それが協働である」と言い、クライアントとのパートナーシップには信頼関係が不可欠なことを伝えていた。また、指導者は「(クライアントは)自分の人生を決める機会がなく、40年間入院している。クライアントの希望に寄り添いながら、安心して地域で生活できる形を考える必要がある」とクライアントの『権利擁護』を目指し、その自己決定の支援の大切さを伝えていた。

これらの経験により、C氏は「『協働には信頼関係が重要』という学校で学んだことを身体で感じた」「協働はクライアントの自己決定に基づく目標を共有し、共に力を合わせて活動することを意味している」「管理体制が強い精神科病院において、クライアントの自己決定には信頼関係が重要」といった『援助における関係性の大切さ』を学んでいた。

3) 実習全般を通して指導者から指導されていたこと

実習全般を通して、C氏は「断定したり言い切ったりする表現が多く、かといって(それを判断する)根拠が浅い」と指導者から指摘されることがあった。加えて、指導者は「(不適切な)言葉かけが(クライアントの)信用を失うこともあるので、意識して会話する方がいい」「(PSW)自身の立ち位置を常に確認しながら、日々の業務に取り組むことが大切」と援助者の立ち位置や発する言葉の大切さを伝えていた。また「PSWの仕事は答えのないこと、結果も目に見えないことが多く不安になることが多い。だからこそ、いろんなものの考えができることが大切」と事象に対する『多角的なとらえ方の必要性』を伝えていた。そこから、C氏は「クライアントの生活上の問題に対して、(援助の)根拠を示す重要性」を学び、自身にPSWとして「偏った視点」があることに気づいていた。また「学校で学んだ『本人(クライアント)の意思の尊重』が、実際のクライアントとのかかわりでは、それができなくなっていた」と語り、座学で学んだPSWの視点を実際の支援/援助に活用する困難さに直面していた。また、日々の振り返りから自分自身の感情や思考に向き合う経験に対し「自身が『何を大切にするのか』を問い続けた実習は精神的に辛かった」と自己覚知の重要性を語っていた。

そして、指導者から「(クライアントは)長期入院を続けることで、『生きる』意欲がどんどん低下する。それは、病院の責任、地域の責任、全ての精神科医療に関わるものの責任であると思う。人はみな、自分らしい生活をする権利を持っている。入院が長引くことで本人の意欲が低下し、『このままでいい』と言われる言葉の重みを感じながら、それでも私たちは地域で生活する権利を保障しなければならない」と伝えられ、C氏は「(PSWには)クラ

イェントに対する『権利擁護』の役割がある」ことを体験的に理解していた。また、「指導者自身が実践において誰のための何の支援／援助なのかという確認作業を丁寧に行っていた。それがクライアントのアドボカシーの保障につながる」と別の体験からも、PSWの『権利擁護』の重要性を学んでいた。さらに、C氏は「(指導者が)クライアントの生の声を聴き、想いを確認するため、時間ができれば病棟へ出向くなどクライアントとのコミュニケーションを大切にしていた」「クライアントのできることに着目した視点が実践で有効と感じた」と、PSWの支援／援助から『クライアント主体』や『ストレングス視点』という専門性について学んでいた。

IV. 指導者から伝授されたPSWの価値を実習生が体得していく過程

1. PSWの価値の体得に至る実習生の共通課題と指導者によるスーパービジョン

PSWの価値には、『人権擁護』と『社会正義』を究極的価値とし、その中核的・手段的価値として『個人の尊重』『人と環境の相互作用の観点』『生活者の視点』『自己決定の支援』などがある。PSWの養成課程における新カリキュラムでは、これらの価値を講義や演習で学び、実習で体験的理解を図りながら体得するという体系化された学習が設定されている。そのため、指導者には実習時のスーパービジョンを通じて、PSWの価値を伝授することが求められる。

実習の開始にあたって、実習機関の特徴をふまえ、指導者は実習生とともに実習目標並びにそれに向けた実習計画を作成する(管理的スーパービジョン)。本調査の実習生も自身の実習に対する希望をもとに、指導者と実習機関の行事やプログラムを活用した実習計画を作成していた。実習方法には、指導者がPSWのモデルとしてみせる観察学習や実習生が直接援助にかかわる体験学習があり、いずれの学習も指導者によるスーパーバイズが行われる。それには、その場で行うライブスーパービジョンもあれば、日々の実習終了後に記録等を用いながら「振り返り」と称するスーパービジョンもある。このようなスーパービジョンを通して、実習生は職場や職種の理解が促され、PSWのアイデンティティの形成とともに、PSWの価値を体得することになる⁶⁾。

本調査をみると、実習生は実習開始当初は現場体験そのものに戸惑いを感じ、体験への『気づき』『言語化』『自己覚知』において課題がみられた。

- ・PSWの視点に基づいたかかわりをしようと思ってもできなかった(C)
- ・(かかわりのなかでクライアントのことを)知りたいけれど知ってしまっても何も出来ない無力感との狭間の困惑があった(B)

この言葉にみられるように『気づき』に関して、実習生は実習に臨む姿勢や態度を座学で

6) 米本秀仁(2007)「ソーシャルワーク実習とスーパービジョン」『ソーシャルワーク研究』33(4), 220-223.

学びながらも、いざ実習現場にでると、どのような問題意識や視点をもって臨床に向えばよいかかわからないという不安や困惑があった。また、実践における『気づき』を得たとしても、それを客観的に言語化する困難があるという課題もあり、それはPSWになる自信を失うことにもなっていた。そのような実習生に対して、指導者は実習生の人柄や価値観を尊重しながら、援助者を目指す自分と向き合えるように、受容的かつ非審判的態度で接していた（支持的スーパービジョン⁷⁾。

「(実習の)緊張感から言葉がでなかった」というB氏を例にあげると、指導者は日頃の実習生の戸惑いを見極め、受容的な態度で感情の吐露を促していた。

- ・マイナスのことを言っても批判せず受け止めてくれた。そのおかげで自然に感じたことを大切にできればいいと思えた (B)

このように、B氏は抑圧していた否定的な感情を指導者に受容されることで、自身の感情を客観的に捉える大切さに『気づき』があった。それは自分自身を客観視する余裕がない時期にあったA氏やC氏も同様であり、各々の指導者は「断言した言い方 (A)」 「根拠のない断言 (C)」を批判したり審判したりすることはなく、実習生自身への気づきを、以下のような言葉で促していた。

- ・(援助に対する)不安や困惑を持っている自分に気づくことが必要 (B')
- ・現場で感じるひっかかりや疑問が価値の原点である (C')
- ・クライアントの生の声を聴いて、そこから感じたことや疑問を表現することが大切 (C')

このように、指導者は実習生の『気づき』や『疑問』の大切さを伝授していた。また自己覚知に関して、A氏の指導者は次のような言葉かけをしていた。

- ・もっと自分を見ていくことが大切 (A')
- ・こうあらねばならぬ枠からはみ出ることが難しい (A')

また、A氏の指導者はPSWの視点や姿勢に関する『気づき』も促していた。

- ・生活者の視点やPSWの専門性に基づいた気づき大切である (A')
- ・本人の言葉、思い、生活、人生から学ぶことが大切である (A')

さらに、言語化を苦手とするA氏に対して、指導者は次のような言葉をかけていた。

- ・PSWは言葉が武器なのでもう少し言葉を出さないといけない (A')

このような指導者による『気づき』『言語化』の促しに対して、A氏は「指導者との振り

7) 村田久行 (2010) 「援助者の援助—支持的スーパービジョンの理論と実際—」川島書店。

返りの時間があったから、自分なりの言葉で表現できるようになった」と教育的スーパービジョンの有効性を述べていた。

また、C氏も自己覚知に対して、指導者から以下のような言葉かけを受けていた。

個人の価値観

- ・断定したり、言い切ったりすることが多く、かといってその根拠が浅い (C')

援助における立ち位置

- ・自分の立ち位置を常に確認することが大切 (C')

援助者としての技能

- ・一つの言葉で (クライアントの) 信用を失うこともあるので意識して会話をするように (C')

このように、指導者による教育的スーパービジョンは日々の『振り返り』を通して行われ、対話を重ねながら実習生の『気づき』やその客観化を図る『言語化』を促していた。指導者は実習生の学びの度合いにあわせて、受容的な態度で援助主体の自身への洞察を促していた。これにより、実習生は自身の感情や言動を省察でき、『言語化』の課題も含めた自己覚知が可能となっていた。つまり、指導者による支持的・教育的スーパービジョンにより、実習生は援助者としての自覚や自身の価値観や対人関係のもち方などの意識化が可能になるといえる。しかし、このような自己覚知の作業は、援助者になる前の一人の人間としての未熟さに向き合うことにもなるため、実習生3名ともがこの作業を「辛い」と語っていた。

- ・ (クライアントに) 偏った視点を持っていた (C)
- ・以前の実習で援助関係がうまくいかなかったことが、今の実習の援助関係に影響している (B)
- ・勉強不足、自分の持つ感覚がPSWにとって不適切なものであれば、クライアントに不利益になる… (B)

加えて、これらの言葉が示すように、指導者の支持的・教育的スーパービジョンにより、実習生はPSWの価値形成や援助主体「になる」自身に対する『自己覚知』が可能となっていた。空閑浩人は「ソーシャルワークの実践とは、ソーシャルワーカーである『人』が、自らの『身をもって』、ソーシャルワークの知識を活用し、方法・技術を駆使する (しようとする) 営みである」⁸⁾と述べているように、指導者が「モデルとなるPSWの言動をみせる」「PSW実践の場におけるライブスーパービジョン」「日々の実習の振り返りにおけるスーパービジョン」を行うことで、実習生の援助主体「になる」自己洞察が進み、「PSW」というア

8) 空閑浩人 (2012) 「まえがき」空閑浩人編『ソーシャルワーカー論—「かかわり続ける専門職」のアイデンティティ—』ミネルヴァ書房。i-vii.

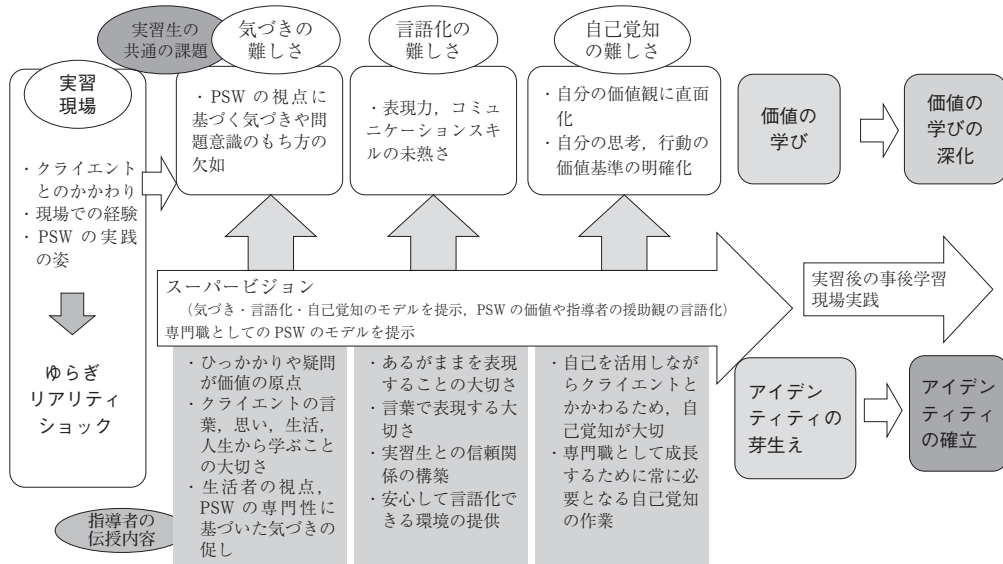


図1 PSWの価値の学び・アイデンティティの芽生えに至るまでの実習生の共通の課題と指導者の伝授内容

アイデンティティの醸成が可能となるといえる⁹⁾(図1)。

2. 実習生のPSWの価値の体得を促す指導者のスーパービジョン

1) 具体的な個別事例や事象から普遍的な価値の学び

実習生が座学で学んだPSWの価値を体感的に理解するには、実習時の具体的な個別事例や事象に対して指導者が支援/援助の根拠を示すことで可能となっていた。

地域生活支援センターで実習したA氏は、実習計画の作成時に『クライアントから学ぶ』ことを実習目標にあげていた。フリースペースでクライアントと時空間を共に過ごすプログラムにおいて、指導者のクライアントに接する姿勢や態度を見ることで、『一人の人としての対等性』や『クライアント同士の相互支援』の重要性、『楽しい時間の共有』『リカバリーのきっかけづくり』というPSWの役割を学んでいた。また、指導者からは『個性』『主体性の尊重』を基本とする援助こそが、クライアントの『権利擁護』につながると伝授されていた。

・クライアントから学ぶ→クライアント主体→リカバリー→個人の尊重→権利擁護

また、A氏はクライアントの経済状況を考慮できなかった個別支援計画を実施したことで、クライアントに不利益が生じてしまったことに対して、指導者から「自分の枠で物事を考え

9) 坪上宏(1984)「社会福祉実践の成立要件と方法・技術・援助関係論」中村優一・小松源助編『講座 社会福祉実践の方法と技術』有斐閣。

ている」「クライアントの生活、人生から学び、様々な価値観やクライアントの思いを知ってほしい」と指摘され『生活者の視点』『人と環境の相互作用の観点』を伝授されていた。

クライアントの理解→クライアントの生活状況の理解→生活者の視点／人と環境の相互作用の観点→権利擁護

さらに、A氏が実習していた当時、施設は『障害者自立支援法（現、障害者総合支援法）』の施行を目前に控えていた。新法ではサービス利用に際して応益負担が規定されることになり、それによってクライアントのサービス利用の希望が低減し、その結果クライアントの生活に不利益を被るおそれがあった。指導者はクライアントの『自己実現』を目指した法制度を求め、他機関と機関の枠を超えて社会に働きかけていた。そこからA氏は『クライアントの自己実現』をめざすために、『ノーマライゼーションの社会』を創る必要があることを学んでいた。指導者からは『社会変革』を目指すソーシャルアクションが『社会正義』『権利擁護』につながることを伝授されていた。

クライアントの自己実現→ノーマライゼーションの社会→権利擁護・社会正義

C氏は長期入院者が退院を拒む姿に直面した時、指導者からクライアントの言動の背景を考慮し、『クライアント主体』『ストレングス視点』といったPSW固有の専門性に基づく援助の必要性を指摘された。精神科医療の歴史や地域の受け皿の乏しさから退院が困難であった歴史的背景も考慮し、クライアントの『自己決定の支援』や『地域で生活する権利の保障』には『クライアントが望む社会の創造』や、『ノーマライゼーションの実現』がクライアントの『その人らしい生活の実現』『人権の尊重』『社会正義』につながると伝授されていた。

退院の拒否→クライアントの望む社会・自己決定→ノーマライゼーションの社会→権利擁護・社会正義

以上のように、実習生は実習で出会った個別事例や事象による多様な気づきを言語化することでその客観視が可能となり、PSWの価値を考える機会を得ていた。指導者は実習生の学びのタイミングを見極めて、指導者がPSWの価値の観点から教育的スーパービジョンを行うことで、「関係性（A）」「援助関係（B）」「協働（C）」といった援助における関係性や、援助主体になる自身に対する自己覚知の必要性を体得していた。そして、個別な事象のなかで、手段的価値である「リカバリー（A）」「個別性（A）」「自己実現（A・C）」「自己決定（B）」「ストレングス視点（C）」や中核的価値である「個人の尊重（A）」「人と環境の相互作用（A）」「生活者の視点（C）」、究極的価値である「社会正義（C）」「権利擁護（C）」と

いったより抽象的な PSW の価値を体得させることになっていた。そして、養成校における実習の事後学習において、これらの価値の体得に関して実習生は認識を深めていた。

2) 価値のジレンマによる PSW の価値の学び

精神保健福祉士の実践のなかで対峙する価値には、専門職業的価値、個人の生活歴等によって形成された個人的価値、社会的価値、所属機関の組織的価値がある。それらの個人的価値、専門職業的価値、組織的価値、社会的価値は独立しているものの、相互に関連しあいながら存在するため、各々の価値が対立することがある¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾。

PSW の実習指導者は、実習を受けている期間/時にも、同時に/並行して PSW の実践を行っている。指導者自身も実践上の困難さに直面し、価値のジレンマと向き合いながら援助しているのである。本調査においても、「新法制定とクライアントの生活の質の向上 (A')」「精神科医療の非自発的入院や隔離、拘束とクライアントの人権や自己決定 (B')」「病状的には退院できるのに退院を希望しない長期入院者への退院支援、地域の受け皿のなさや精神科医療の歴史 (C')」といった場面で、指導者自身も価値のジレンマを抱えながら援助を行っていた。指導者はその場面に立ち会った実習生にそのジレンマを分析し、根拠を示しながら指導者が優先した価値判断を伝授していた。それは、同時に、価値のジレンマを抱えながらも現場に向き合い続ける PSW の姿そのものをみせることにもつながっていた。

① A' 指導者：「新法制定」と「クライアントの生活の質の向上」

指導者の価値のジレンマの背景には、『障害者自立支援法（現、障害者総合支援法）』の施行に伴い、サービス利用に対する応益負担が規定されたことがある。それは2つの価値のジレンマを生むことになった。

一つは、応益負担に基づく制度を施行する社会的価値とクライアントの利益を重視した専門職業的価値のジレンマである。『障害者自立支援法』は高騰する国の社会保障費を背景として、サービス利用に対する応益負担が規定された。しかし、応益負担はサービス利用意欲の低減を生み出し、クライアントの生活の質を低下させてしまうことが予測される。そこで、指導者は制度改正に向けて応益負担の方策を提案し、他機関と機関の枠を超えて連携しながら社会に働きかけていた。

他の一つは、新法の枠内で事業を進めていく組織的価値とクライアントの利益を重視した専門職業的価値である。『障害者自立支援法』施行に伴い、法人施設の利用が応益負担と規

10) 横山登志子 (2006) 「地域生活支援をめぐる精神科ソーシャルワーカーの本質的使命—2つのジレンマを手がかりとして—」『社会福祉学』46(3), 109-121.

11) フレデリック・G・リーマー著 秋山智久監訳 (2001) 『ソーシャルワークの価値と倫理』中央法規出版.

12) 栄セッコ (2014) 「精神保健福祉士の価値に基づいた実習教育に関する研究—ソーシャルワーカーのアイデンティティを伝授する試み—」同掲書.

定された。それは、施設を居場所としているクライアントにとって経済的・精神的負担を強いことが推察できた。そこで、指導者はクライアントの個性を重視しながら、クライアントが納得するまで法制度を説明していた。

このように、指導者がPSWの『クライアントの利益重視』を第一義にした実践に対して、実習生は「これぞ、ワーカー！」と感じ、PSWの『社会正義』『人権擁護』というPSWの価値を体得することができていた。

② B' 指導者：「精神科医療の非自発的入院や隔離・拘束」と「クライアントの人権や自己決定」

『精神保健福祉法』には、精神科病院、精神保健指定医の責務、入院形態が規定されている。B' 指導者は専門職業的価値の『自己決定の尊重』と他職種の専門職業的価値の『治療による権利擁護』のあいだにジレンマを抱いていた。その二つの価値は対立するものではないものの、精神障害者に対する処遇が人権侵害につながり、「支援者」「援助者」と称する者の加害性を意識することが必要となる。

指導者は、精神科医療の特異性である非自発的入院や隔離・拘束の必要性を示しながら、クライアントの『自己決定の支援』よりも、生命の安全を護るためには治療を優先せざるを得ない状況を説明していた。そしてB氏はクライアントの行動制限を最小限にする選択肢の提示がクライアントの『権利擁護』につながると伝授されていた。

行動制限の必要性→自己決定の尊重 VS 治療の優先→権利擁護

③ C' 指導者：「病状的には退院できるのに退院を希望しない長期入院者への支援」と「地域の受け皿のなさや精神科医療の歴史」

精神保健福祉士が国家資格化された背景には、他の先進国に類のない精神科病院におけるベッド数や入院者数の多さがある。精神障害者が法的に福祉の対象となったのは1995年の『精神保健福祉法』の成立を待たなければならず、遅々として進まない精神保健福祉施策の現状がある（社会的価値）。このような国策を背景として、精神科病院では「社会的入院者」数の多さが課題となっている。特に、民間立の精神科病院が多いわが国では、入院者数そのものが医療機関の財源に反映されることも、それを後押しするものとなっている（組織的価値）。しかし、それはクライアントの立場にたつと、『社会的入院は人権侵害になる』という考えから¹³⁾、『権利擁護』を専門職業的価値とする精神保健福祉士はそれらの価値にジレンマを抱くのである。

C' 指導者は退院を希望せず「このままでいい」という入院者の言葉に着目し、「それは、

13) 大阪府精神保健福祉審議会（1999）大阪府精神保健福祉審議会答申。

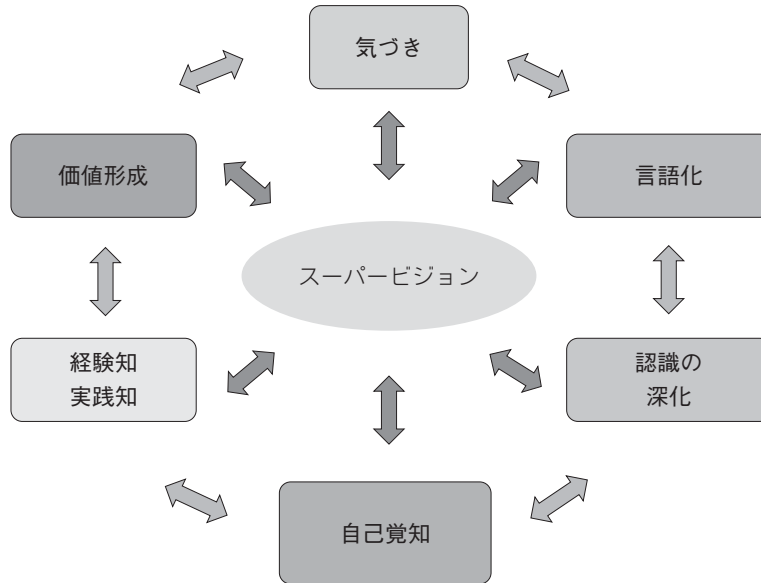


図2 価値形成の深化のプロセス

病院の責任，地域の責任，すべての精神科医療に関わるものの責任である。人はみな，自分らしい生活をする権利を持っており，『このままでいい』と言われる言葉の重みを感じながらも，それでも私たちは地域で生活する権利を保障しなければならない」と実習生に伝授していた。退院を希望せず「このままでいい」というクライアントの言葉を自己決定とみなすのではなく，地域の受け皿のなさや精神科医療の歴史と向き合いながら，クライアントの『自己実現』に向けて，試行錯誤のなか援助する姿を伝授していた。これを受けた実習生は『クライアントの言葉から学ぶ』『人と環境の相互作用』『クライアント主体』というPSWの価値を体得していた。

このように，指導者は価値のジレンマに対して，実習生に価値の優先基準を明確に示すなかで，自身の援助観やPSWの価値を伝授していた。

以上のように，実習生は『気づき』『言語化』『自己覚知』をふまえて，指導者による個別事例や事象の普遍化，PSWの価値のジレンマに関する教育的スーパービジョンを受けて，「気づき→言語化→認識の深化→自己覚知→経験知・実践知→価値形成→気づき…」という価値形成の深化を経験する。これは，コルブによる体験学習のプロセスモデルと符合するものであり¹⁴⁾，PSWのアイデンティティを醸成するプロセスになると考えられる（図2）。

3. 援助者「になる」段階に応じた価値の深化と価値の重層性

実習生のPSWの価値の学びは養成校における教員からの教授に始まり，実習で指導者に

14) Kolb, D. A. *Experiential Learning: Experience as the Source of Learning and Development*, Prentice Hall, 1984, 42.

よる PSW の価値に基づいたモデルとなる実践を観ること、指導者から日々の実践の「振り返り」における支持的・教育的スーパービジョンを受けること、そして実際に実習生が PSW の援助を体験することを通じて可能となっていた。その後、実習の事後学習や現場実践を経ることにおいて、PSW の価値に関連する新たな気づきが生まれ、その言語化の広がり認識の深化を描きながら、PSW の価値の認識に深みを増すことになるといえる。以下、実習時に体得できなかった価値が PSW の現場実践のなかで言語化が可能になった発言を示す。

- ・働き始めて、PSW の価値とは何かを更に自覚するようになった (A)
- ・現場とのかかわり後に気づけたことがある。実習終了直後はできなかった (C)
- ・その時は腑に落ちず、消化できない悔しさや苦い思いを抱え続けていたが、その時の指導者の言葉はずっと残っており、それが現場に出て意味を持った (C)

たとえば、C氏は PSW の現場実践を経て、その価値を以下のように言語化している。

- ・退院は『目的』ではなく、その人らしい生活の実現を目指す『方法』である→『個性の尊重』
- ・精神科病院でクライアントを生活者と捉えることが大切→『生活者の視点』
- ・(クライアントが) 自分自身で地域生活に向けた決定をしていくことを権利としてとらえることが大切→『自己決定の支援』

また、

「クライアントとのかかわりを客観的にとらえることで、自分の物事のとらえ方の偏りに気づいた」と援助主体「になる」自身の自己覚知の必要性を再認識していた。

このように、「実習事前学習→実習期間→実習事後学習→PSW の実践 (実習指導)」という過程のなかで、PSW の価値の体得が可能となっていくことから、PSW 「になる」ためには常に自らの実践を振り返り、PSW の価値の再認識を繰り返す作業が必要といえる。

また、本調査の指導者に対するインタビューにおいても、後継者の実習教育を通じて、指導者自身の PSW の価値の深化がみられた。「『価値の伝授』『価値の可視化』について、指導者も整理しておかないと実習生に伝えることはできない」という意見は指導者に共通していた。指導者は「実習指導者」という役割を得て、実習生へのスーパービジョンにおいて自らの日々の実践を意識化、言語化、可視化しながら PSW の価値を伝授することで、指導者自身も PSW の価値を再認識することにつながっていたのである。また「実習生から現場の人間も学ぶ。実習生、実習機関の指導者、教育機関の教職員の学びは相互作用がある」という意見もあり、指導「する－される」者、教育「する－される」者という二項対立の関係をこえて、実習にかかわるすべての者が相互に影響しあいながら、各々が PSW の価値に基づく実践者として成長をもたらすといえる。このように、PSW はその成長段階に応じた価値の形成／深化の過程は PSW 「になる」過程といえよう¹⁵⁾ (図3)。

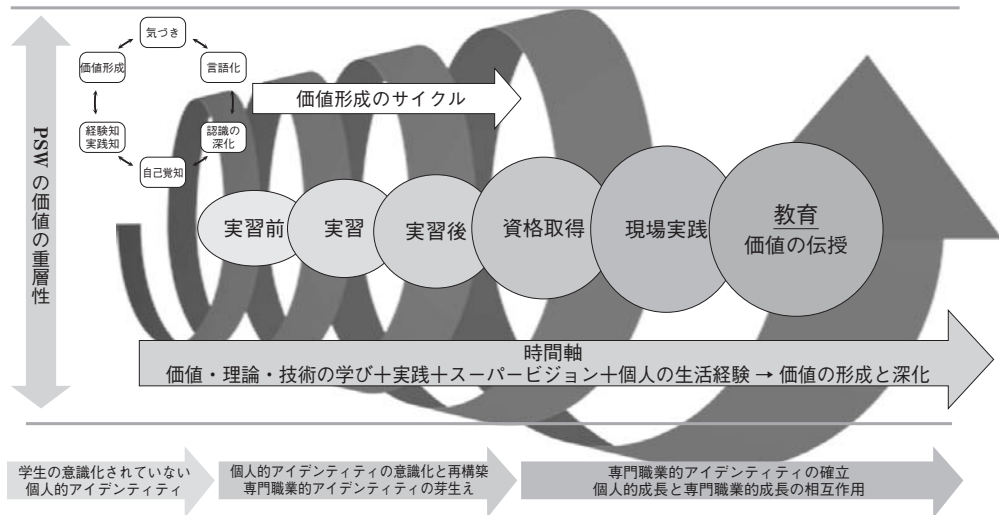


図3 成長段階に応じたPSWの価値の深化と重層性

本図における横軸は、PSWのアイデンティティの成長過程を示している。専門職教育の入り口段階では、実習生はまだ自分の持つ価値観や自身のアイデンティティの意識化が難しい。その後の実習で、個別事例や事象からPSWの価値に関する『気づき』『言語化』に対して、指導者による支持的・教育的スーパービジョンを受けて、実習生は援助主体となる自身の『自己覚知』が促進される。この『自己覚知』は実習生に自己洞察を深めることになり、「PSW」のアイデンティティの意識化を可能にさせることになる。また、先述のように実習生はモデルとなるPSW像の獲得や、PSWの模擬体験によっても「PSW」のアイデンティティの醸成がみられた。

実習を終えたB氏が現場実践を経て「一人ひとりの人生にかかわる上で、自分の無知がその人の不利益になりうるという危機感から、学生時代よりも情報収集や知識の取得に貪欲になった」「学びに対する責任感が出てきた」と述べ、B氏自身が実習生のモデルとなる援助観を言葉にしていた。

- ・時間をかけてクライアントに寄り添い、受容や共感の徹底を大切にしている (A)
- ・クライアントが何に困り、苦しみがあるのかをきちんとつかまないと次につながらないと思っている (A)
- ・「楽しい時間の共有」「リカバリーのきっかけづくり」を大切にしながら、クライアントのエンパワメントが可能な環境調整や「知識や技術の裏打ちがなされているクリエイティブな実践」を目指している (A)
- ・目の前の一人ひとりに出会えた幸せと感謝と、その人たちの笑顔の一部になれるようなPSWを目指している (B)

15) 栄セツコ (2014) 『「援助者」に『なる』ということ』『響き合う街で』107, 40-43.

- ・クライアントの権利侵害ではないかという場面に遭遇してきた。その度に、葛藤や迷い、『何を大切にするのか』を問い続けてきた (C)
- ・指導者の「クライアントの言葉から学んでください」という言葉を基本姿勢として持ち続けている (C)

また、PSW の成長には自身の生活経験が影響することも多い。B氏は「自分自身、病気になったことで損をしたと思いたくない。だからこそクライアントにも自分らしい生活をしてもらいたいと思う (B)」と自らが病気に向き合うことで、クライアントの生活に対して共感的理解が進み、それはPSWとしての援助観に幅をもたせることになっていた。このように一人の生活者としての成長とPSWという専門職としての成長は相互に影響しあっていることから、PSWは常に「生活者」である自身への洞察を深め、専門職業的なアイデンティティを含めた自身の理解を図る必要がある。

縦軸の「PSWの価値の重層性」は、実習生が生活者としての個人の成長とPSWとしての成長を遂げるほど、PSWの「生活者の視点」という価値の重層性が増してくる。個人のライフステージのなかで人生経験の幅が広がり、一人の生活者として多様な価値観をもつにつれて、生活者の視点は広がり、援助において柔軟性を持つことになる。

このような価値形成のプロセスに関するインタビューでは、いずれの指導者も可視化が困難なPSWの価値の伝授に際して、常に『クライアントから学ぶ』姿勢を持ち、価値に基づいた実践とは何かを問い続けながら援助する姿を実習生にみせていたと語っていた。PSWの実践とその省察を循環的に行う「価値形成のプロセス」のスパイラルのなかで、PSWは常に自身の「かかわり」を客観視し、クライアントとの援助関係やPSWの価値の実現を問い続けることで、価値の深化や重層性も増していくと考えられる¹⁶⁾¹⁷⁾。

C氏が「何かがあるたびに『何を大切にするのか』を問い続ける『癖』は精神科病院での実習を経験していなければ身につけていなかった」と語り、PSWの価値を再確認する姿勢は実習指導者によるスーパービジョンが原点になっているという。本調査においても、実習生は卒後実践で悩んだ時に、実習経験を振り返ることでPSWの原点に立ち戻っていた。それを以下に示す。

- ・(現場に出てから) 枠にはまった援助をしがちな自分自身にとって、実習を振り返ることで殻を破るきっかけになる (A)
- ・(援助がうまくいかない時は) 実習で経験した援助のあり方を、自分のPSWとしての援助として発揮している (A)
- ・実習で出会ったクライアントのいきいきとした表情を思い浮かべながら仕事をしている (B)

16) 栄セツコ (2015) 『『援助者』と名乗る私は何者かに問われる関係性』『響き合う街で』109, 49-52.

17) 栄セツコ (2015) 『『援助者』の定義権はクライアントにある』『響き合う街で』111, 48-51.

- ・実習の終わりに、クライアントが寂しがってくれたことに嬉しさや楽しさと、実習時に感じた申し訳なさや無力感といったものが今の自分の原動力になっている (B)
- ・何かがあるたびに、「何を大切にするのか」を問い続ける「癖」は精神科病院での実習経験がなければ身につけていなかった (C)

このように、実習における PSW の価値の体験的理解が現在の PSW の実践に活かされていた。このことは、価値の学びは実習時に完結するものではなく、養成校における事前／事後学習や PSW の現場実践を通して、更に深化することを意味する。その PSW の価値形成のプロセスに重要となるのが実習生に対する指導者のスーパービジョンである。指導者によるスーパービジョンにおいて、PSW の価値をいかに伝授できるかが、実習生にも指導者自身にも PSW の長期的な成長過程のなかで重要な意味を持つといえる。このことから、実習生が PSW の価値を体得し、PSW の原点となるような学びを得るには、指導者が自らの実践を客観化し、そこから価値を意識化・言語化・可視化する力と、それらを用いて価値の学びに導くスーパービジョンを行う力が必要であるといえる。

V. 本調査の限界と今後の課題

1. 本調査の限界

本調査のインタビューが実習生や指導者の代表性を示すものではないが、実習生と指導者の双方から PSW のアイデンティティの構築過程を析出した点で意義あるものと言える。しかし、実習生のインタビューに指導者が同席したことは、その相乗作用により有効的な結果がみられる一方で、PSW の価値の伝授に対してネガティブな感情や発言が制限されることが推測できる。今後、このような課題と本調査結果をもとに、インタビューの対象や方法を再考した調査設計を立案する必要がある。

2. 今後の課題

精神保健福祉士法の改正により、新カリキュラムの実習指導内容は実習担当教員が週 1 回以上の巡回指導を前提としつつ、実習施設との連携の下で、学内指導が行えることになった。また、2012年度から実習指導者研修が始まり、実習指導者に標準化された実習内容が明示されることとなった。「実習前—実習時（巡回指導・帰校日指導も含む）—実習後」といった実習過程にそって実習生、指導者、養成校教員に加えて、当事者を入れた四者の連携に基づく実習指導のあり方を提示する必要がある。しかし、実習指導者による PSW の価値の伝授法に対する評価基準はなく、実習機関やその担当者に任されているのが現状である。このことから、指導者のスーパービジョン能力の向上を図る方策として、実習指導者研修を生涯教育の一環として継続的に行うことが不可欠といえる。本調査においても、PSW の実習指導は精神保健福祉士という専門職が担う責務の一つであり、指導者自身の専門職教育の一過程

として捉えていた。今後は、PSW の生涯教育の一環として実習指導におけるスーパービジョンを位置づけることが PSW の専門性の向上に不可欠といえる。それは、クライアントから「援助者」と認められるためにも不可欠な作業といえよう。

謝辞

インタビューにご協力いただきました皆様に深く感謝致します。

本稿は、桃山学院大学総合研究所共同研究「精神保健福祉士の価値に基づいた実習教育に関する研究」の成果報告の一部である。

(2015年11月19日受理)

A Study on Training Workshops Based on the Value
of the Work of Psychiatric Social Workers
— An Observation of the Process of Trainees Learning the Value
of Work of PSW Taught by Their Trainers—

YAMAUCHI Haruhi
SAKAE Setsuko

The Psychiatric Social Worker Act issued in 1997 was amended in 2011, putting more emphasis on exercises and training sessions in the training course. Training sessions are thought to play an important role in understanding the value of the work of psychiatric social workers (PSWs) and the formation of one's identity as a PSW. However, no study has so far investigated how trainers teach the value of the work of PSWs to trainees.

This study clarifies how trainers teach the value of the work of PSWs to trainees and how the trainees acquire the knowledge by conducting semi-structured interviews with trainees and their trainers. We found that trainees experience a process: awareness, verbalization, deepening recognition, self-awareness, recalling knowledge from experience and practice, and value formation. At each stage of the process, the trainers supervise and teach the value of the work of PSWs to the trainees by teaching them to extract abstract values from specific cases and then choose which value to prioritize among contradicting values. The trainees strengthened their learning through a post-learning and field practice after the training. We consider the abilities of regarding their practice objectively, visualizing and verbalizing the value of their work, and maximizing their ability to supervise as prerequisites to being good trainers.